

対談

守

創

破

英語をはじめとする日本の教育現場における課題とは何か。新しい知識を生涯探究していくための「教養」とは。米国のイエール大学で教べんを執られた後、現在は日本で英語塾の代表を務める齊藤淳氏と若田部昌澄副総裁が未来を見据えつつ語り合う。



日本銀行副総裁

若田部昌澄

Masazumi Wakatabe

1965年神奈川県生まれ。87年早稲田大学政治経済学部経済学科卒業、90年早稲田大学大学院経済学研究科修士課程修了、91年早稲田大学政治経済学部助手、94年トロント大学経済学大学院修士課程修了、98年早稲田大学政治経済学部専任講師、2000年早稲田大学政治経済学部助教授、05年早稲田大学政治経済学術院教授、17年コロンビア大学経営大学院日本経済経営研究所客員研究員。著書に『危機の経済政策』（日本評論社）など多数。18年3月日本銀行副総裁就任。

英語をきっかけに 自ら探究する力を育む



J PREP 齊藤塾代表

齊藤 淳

Jun Saito

1969年山形県生まれ。上智大学外国語学部英語学科卒業、イエール大学大学院政治学専攻修士課程修了、博士号。ウェズリアン大学客員助教授、フランクリン・マーシャル大学助教授、イエール大学助教授、高麗大学客員教授を歴任。各大学で「国際政治学入門」「東アジアの国際関係」等の授業を英語で担当したほか、2002～03年衆議院議員（山形4区）を務めた。12年に英語塾 Logos を起業（13年、現「J PREP 齊藤塾」に改称）。著書に『10歳から身につく問い、考え、表現する力 ぼくがイエール大で学び、教えたいこと』（NHK出版新書）など多数。

英語が広がる世界
わくわくするような経験を

若田部 齊藤さんは、米国の名門大学で政治学について教べんを執られた後、二〇一二年に東京と故郷の山形県酒田市に英語塾を開設され、現在、その塾を主宰しておられます。塾を開校された経緯についてお話しいただけますか。

齊藤 私は、上智大学の大学院から米国イエール大学に留学しました。イエール大学大学院で政治学の博士号を取得した後、同大学などで六年ほど政治学を教え、母の介護のため帰国しました。その際、大学の教壇に立つことも考えましたが、それ以上に自分がやりたいことをダイレクトに実現できると考えて、今の英語塾の前身となる塾を開きました。

若田部 ご自身のやりたかったことについて具体的にお話しいただけますか。

齊藤 大学の教員にしても英語塾を主宰するにしても、私自身、一貫して「不平等や格差の解消に挑む」というテーマを持って取り組

できませんでした。米国で政治学者だったときには、議員定数の地域別格差を是正するとどうなるかが研究テーマの一つでした。帰国後は、東京と地方の格差です。なかでも英語教育に関する格差について考えると、自分が生まれ育った山形など地方は東京と異なり、小さい頃から英語教育を受ける選択肢がそもそもないところが多い。住んでいる地域によって良質な英語教育に接する機会に差がないようにできないか、という問題意識がありました。あるいは日本で生まれ育つこと自体、英語を使って仕事をするにあたって不利な条件にならないかなど、いろいろな意味で、格差や不公平を小さくできないかと。そういう英語に関する格差を自らが作った塾で解消していこうと考えました。

若田部 確かに、世界で使われている大学の標準的な教科書は英語で書かれたものが多いため、英語を母語とする人たちは、そうでない人に比べて有利ですよ。

齊藤 一般に各国で使われている大学の一般教養の入門書はわかり

やすい。そういう書籍は大概英語で書かれています。そうしたことが一つとっても、英語で学べる技能を手に入れることは、さまざまな可能性が広がるわけです。日本の子どもたちには、そういう可能性を秘めたわくわくするような経験をしてほしいと思っています。

他の生徒にどれだけ刺激を与えたかを問う米国の学校教育

若田部 日本の子どもたちに英語を教える中で、気づかれた課題はありますか。

齊藤 日本の英語教育には二つの問題点があると思います。一つは、どの段階まで到達すれば英語を習得したとみなすのか、生徒も保護者も着地点の目標がないことです。ここまでは英語の学習をする、ここから先は英語で学習するという切り替えが明確でない人が多いと感じます。私どもの塾では、大学で英語を使った授業に対応できるように、さらに英語で議論までできるようにする、という目標設定を提案しています。

二つ目の問題点は、日本では書

くことを重視しすぎて、話して意思疎通をはかるトレーニングが不十分なことです。作文だといことを書くのに、口頭で表現できない。話してコミュニケーションするトレーニングができていない状態で英語を学び始めるため、それが英語習得の足かせになっているのではないかと思うことが多いですね。

若田部 それは英語教育に限らず、日本の教育全般にいえる課題かもしれないですね。

齊藤 ご指摘の通りだと思います。論理的に話すことで物事を伝えるトレーニングをすることが大事です。話すことにより意思疎通をはかることの意味は、学びの共同体の中で知識を共有し、深めながら前に進むということにあると思います。米国の教育現場では、自分の発した言葉によって他の生徒にどれほど刺激を与えることができるとかということが非常に重視されます。日本では、書くことばかりを重視しているため、勉強した成果が自分にしか帰属せず、話すことほどには周囲に影響を与えるこ

とができません。日本の教育を考える時に、こうしたことを意識する必要がありますと思います。

若田部 一般に、日本人は英語が不得意と言われます。極論かもしれませんが、それなら全員が無理して不得意な英語を学ばなくてもいいのではないか、という意見も聞かれます。こうした意見についてどう思われますか。

齊藤 英語を学ぶとどの生徒が伸びるのか、習得した英語によってどのような形で社会に貢献してくれるのか、といったことがあらかじめわかっていたら、全員に学んでもらわなくてもいいのかもしれない。しかし現実には、事前にそうしたことはわからないわけです。そうであるなら、選抜された特定の人だけではなく、一律で学ぶのは理にかなっていると思います。私自身、学生時代は数学が苦手でしたが、高校までに基礎的なことを学んだおかげで、大学院博士課程の経済学の授業は何とかわかりました。どの教科でも基礎的な部分は学んでおいた方がいいと思います。

子どもの強みを生かす 英語教育

若田部 英語教育に限らず、日本の教育の現状についてはどのように思われますか。

斉藤 日本では、公立小学校のカリキュラムより一年早く進む塾に入り、中学入試で高得点を取って良い学校に進学するというような、いわば出し抜きゲームのような状況であるように感じます。また、母語が日本語ではない外国出身の子どもが増えている中で、そういう子どもたちにも日本語をどう教えるかという現代的な課題もあります。そうしたなかで、社会全体で教育の水準を上げ、そのために資源を投入していく、という発想に立たないといけないと思います。英語塾で教育に携わっている私としては、社会全体を底上げするという発想に立てる、そんなリーダーを育てたいと思っています。

若田部 日本人が英語に苦手意識を持つのは、教え方の問題だという声も聞かれますが、斉藤さんはどう思われますか。

斉藤 例えば、昔、いくつかの脈絡

のない英語の例文を、お経を唱えるようにして暗記した経験をされた方もいらつしやると思います。そうした苦行のようなことをしてもつらいだけですし、苦手意識を持つてしまっている、結局英語から遠ざかってしまったという方が多いのではないのでしょうか。それよりは、好きなものもついたり、生きた文を覚える方がよほど効果的だと思います。私どもの塾では、ビデオ教材を使って、それぞれの場面と関連した例文を覚えるといった授業をしたり、小学生であれば、ゲームなどを通して楽しみながら、自然な形で英語を習得することにも力を入れています。

若田部 小学校から英語を教えようとする昨今の英語教育の方向性についてはどうお考えですか。

斉藤 低年齢の子どもたちは、文法的に高度なことは当然理解できませんが、音を拾うのは上手です。英語教育を早期化するのであれば、その年齢の子どもたちの特徴を最大限に生かすように教えることがとても重要だと思いますね。あとは、親御さんが間違えながらも子どもの前で楽しそうに英語を使うというのが一番

いい。私どもの塾でもよく保護者の方から「私の下手な英語で読み聞かせをしていいのですか」と聞かれるのですが、それでいい。そのうち子どもの方が親より英語が上手になって、それが子どもの自信につながっていくと思います。

eラーニングによる 学習の有効性と課題

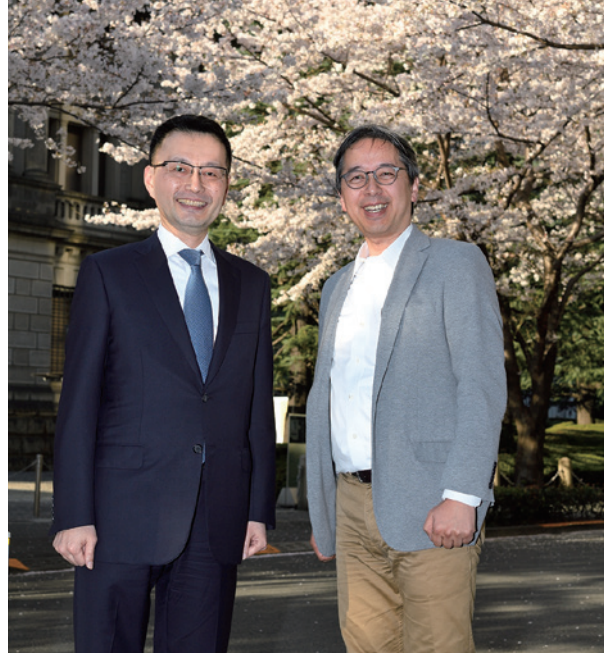
若田部 日本銀行が事務局を務める金融広報中央委員会のテーマに、「金融リテラシー（お金に関する知識や判断力）の向上」があります（金融広報中央委員会の取り組みについては、本誌二〇一六年秋号の「FOCUS ↓ BOJ」をご覧ください）。この金融広報中央委員会の取り組みの一つが金融知識の普及です。例えば最近話題になっている金融詐欺の場合、相手が巧妙になってきているのは事実ですが、インフラ（基盤）という意味での金融の知識を広めていくことが、そうした詐欺への最大の予防策だとされています。ですから日本全国に金融知識を普及していきたいのですが、遠隔地に向いて

いくのにはどうしても限界があり、コンピューターや通信ネットワークを利用して学習する「eラーニング」と併せて進める必要があるのではないかと考えています。英語教育においてはいかがですか。

斉藤 われわれも、eラーニングを一部導入しています。文法などの講義はインターネットで見てもいい、それを使う練習を教室でやりましたよ。

ただ、eラーニングには課題もあります。一つは、いわゆるデジタル・ディバイド（コンピューターやインターネットを使いこなせる者と使いこなせない者の間に生じる格差）の問題。加えて、eラーニングでは自学時間が長くなるので、生徒のやる気の差異が学力格差拡大につながります。また、自分の発言で相手の言葉遣いが変わるなど、意思の疎通が成立する場面面でトレーニングを行わないと言語は上達しません。eラーニングではそうした力を十分育むのはなかなか難しいですね。

若田部 AI（人工知能）のような対話型の仕掛けがあれば、そ



ういった課題は乗り越えられるでしょうか。

斉藤 あくまでも現段階では、自動化された仕組みは、訴求力で人間に及ばないと言われます。若田部副総裁が目の前で語られるのと、ビデオ映像で語っておられるのを観るのでは、効果はまったく違いますよね。eラーニングが得意な事と対面でやるべき事をしっかりと見極めることが、教育の現場では大事だと思っています。

**教養とは知識ではなく
生涯学び続けるための基盤**

若田部 斉藤さんはご著書で、教養の重要性を強調されています。

米国で教べんを執られていたご経験も踏まえ、教養についてのお考えをお聞かせください。

斉藤 日本人は教養という言葉を聞くと常識や知識と考えてしまいがちです。私が考える教養は、生涯を通じて学び続けるための態度や基盤です。正しい知識を獲得していくというより、間違っている、あるいは時代遅れの知識を淘汰し、新しくしていくプロセスを教養と考えた方がいいのかもしれない。そのために必要なインフラやツールとして英語がある。ですから大卒入試のためではなく、学び続けるためのスキルとして英語を捉えてほしいというメッセージを発し続けていきたいと考えています。

若田部 教養とは、哲学者カール・ポパーの言葉ではありませんが、まさに「果てしなき探求」ということですね。

斉藤 そうです。そういう力を養うためには、一般教養の入門書を読んで何かを得るより、ごく限定されたトピックでも構わないので、深く掘り下げてみる経験をする必要があるです。

米国の大学では、例えば東アジア宗教概論ではなく、鎌倉時代の日本の仏教を学ぶといった、ごく限定されたテーマに焦点を当てたコースが多くなっています。なぜそういう限定したテーマにしているのか。結局、概論や入門書は自分で本を読めば習得できる。重要なのは、自分で新しい知識を獲得し吟味するための方法を体得することです。限定されたテーマで、ゼロから何かを獲得する経験をしていくことが大事なのだと思います。

若田部 受け身で習うだけではなく、自ら深く学んでいくということですね。

斉藤 その通りです。決して知識の総量は増えないかもしれませんが、学生のうちにそういうトレーニングを積んでおけば、将来、どんな分野にいつてもそのスキルというのは生きるでしょうし、常に知識やスキルを更新し続けることができるでしょう。私自身の留学、そして教べんを執ってきた経験から、そう痛感しました。

若田部 そうした教養に通じるのかも知れませんが、日本の大学教

育と欧米の大学教育を比較して、欧米の方が古典を重んじる傾向がありますね。例えば、米国の大学では歴史家・政治家のアレクシス・ド・トクヴィルが著した『アメリカの民主政治』は必読文献とされています。

斉藤 欧米では、実際に作品を読み、自分にとってどのような意味があるのか、あるいは現代的な意味は何かということをとことん話し合っって納得するプロセスを踏むのが古典読解の一つのやり方です。日本ではそうした姿勢はあまりありません。

一般教養が、単に講義を聞いて知識を増やすことだと考えるのは、これから自立した社会人として情報の海を泳いで渡らなければならない人たちに對するトレーニングとしては古いと思います。日本でも、欧米の素晴らしい部分は取り入れながら、教養をいかに育んでいくべきかといった議論を深めていってほしいですね。

若田部 本日は、示唆に富んだお話をどうもありがとうございます。